AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2019.7) 平成30年度:79-82.

訪問看護ステーション同行研修における学びと課題

黒﨑 明子, 竹田 弥穂, 金田 豊子

# 訪問看護ステーション同行研修における学びと課題

旭川医科大学病院　　〇黒﨑明子　竹田弥穂　金田豊子
キーワード：　同行訪問、退院支援、継続教育

Ⅰ．目的

地域での暮らしを見据えた看護を提供する能力を育成するために、平成27年度より訪問看護ステーション同行研修を開始した。これは、退院支援看護師育成研修の受講修了者または受講中の看護師が訪問看護ステーションで1日研修するものである。本研究の目的は、高度急性期機能を有する大学病院の看護師が訪問看護に同行する経験から何を学び、自己の課題をどう考えたか、研修における学びと課題を明らかにすることである。

Ⅱ．　方法

１．研究の種類・デザイン

訪問看護ステーション同行研修後の事後レポートによる質的記述的研究

２．対象　平成27年度から平成29年度までの訪問看護ステーション同行研修に参加した18名のうち、研究に同意が得られた16名とした。

３．調査内容　研修終了後に研修の学びと自己の課題について記述した事後レポートの記録分析を行った。学びと自己の課題について、文脈を切らないように内容を抽出しコードを作成した。意味内容の類似性を検討し、サブカテゴリー、カテゴリー化した。

４．研究期間

2018年8月14日～2019年１月31日

Ⅲ．倫理的配慮

研究者の所属する倫理委員会の承認を得て実施した。対象者に研究の概要、目的、方法、個人情報の保護、研究参加は自由意思に基づくことや拒否した際も不利益を被らないこと等を書面で説明し、同意書に署名を得た。

Ⅳ．結果

１．対象者の属性

対象者16名の平均年齢は31歳で、20代が6名、30代が9名、40代が1名であった。平均経験年数は8.1年であった。職位は副看護師長が2名、看護師が14名であった。

データ分析の結果、213のコードを抽出し、研修の学びは7つのカテゴリーに分類した。（表１）　課題は、6つのカテゴリーに分類した。（表2）　以下、カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを〈　〉、コードを「　」で示した。

２．研修の学び

カテゴリーは、【対象を生活者として捉える】【訪問看護師の役割を認識する】【家族を含めて支援を考える】【連携と多職種の関わり】【経済的負担を考慮する】【内省と実践評価】【退院支援における病棟看護師の役割を再考する】であった。

表1　研修の学び

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|---|---|
| 対象を生活者として捉える | 生活の場としての認識 |
| | 病院の非日常性 |
| | 生活者としてみて支援する |
| | 病院と自宅は繋がっている |
| 訪問看護師の役割を認識する | 関係性を築き寄り添う |
| | 訪問看護の実際を知る・訪問看護の視点を知る |
| | 利用者主体のケア |
| | 利用者の理解 |
| | 限られた時間でサービスを提供する |
| | 自宅での生活を可能にする |
| 家族を含めて支援を考える | 家族を含めて支援を考える |
| 連携と多職種の関わり | 多職種の関わりと連携 |
| | サポート担当者会議 |
| 経済的負担を考慮する | 経済的負担を考慮する |
| 内省と実践評価 | 看護の意味を考える |
| | 実践を振り返り、評価 |
| 退院支援における病棟看護師の役割を再考する | 看護をつなぐために必要な情報 |
| | 訪問看護があることを伝え療養の選択肢を広げる |
| | 在宅での生活を捉える |
| | 入院中から地域につなげる |
| | 心理社会的に支える |
| | 訪問看護との情報交換、知識を持つ |
| | 病室が家となるように整える |

表2　研修後の課題

| カテゴリー | サブカテゴリー |
|---|---|
| 生活の視点での情報収集と支援 | 生活の視点の情報収集 |
| | 生活にあった退院時指導 |
| | 患者の主体性を支持 |
| 他職種との情報共有と連携 | 情報共有 |
| | 受け止めや社会的背景などの情報共有 |
| | 生活歴の共有 |
| 早期からの合同カンファレンスの開催 | 合同カンファレンスの開催 |
| | 本人や家族の考えの把握 |
| 療養の選択肢を広げる | 訪問看護の実際を伝える |
| 学びを共有する | 学びの共有 |
| 病棟全体の取り組み | 情報提供方法の検討 |
| | 病棟内のシステムづくり |
| | 問題に対する取り組み |

1）【対象を生活者として捉える】

研修者は「入院生活は患者や家族、生活の場である自宅から切り離された非日常である」と〈病院の非日常性〉を再認識するとともに、「家での生活は、何事も完璧にはいかない」「自宅ではその人らしさ、その人の生活を守ることが重要である」と自宅を〈生活の場として認識〉していた。一方、「病院と自宅は途切れたものではない」と〈病院と自宅は繋がっている〉と捉えた研修者もいた。

2）【訪問看護師の役割を認識する】

訪問看護では「利用者が主体となっている」「その人らしい生き方、生活を考えた上で看護が展開されている」と〈利用者主体のケア〉が実施され、同時に「利用者に寄り添う、生活を支援する」「利用者に安心を提供している」と〈関係性を築き寄り添う〉ものと認識した。さらに、「決められた時間、料金に見合ったサービスを提供する」「その時間は利用者や家族のためだけに看護を行う時間」と〈限られた時間でサービスを提供する〉ことも学んでいた。

3）【家族を含めて支援を考える】

「退院後の生活はあくまでも家族が主体である」「家族の個性や理解力に合わせ、どう取り入れるかは様々である」と【家族を含めて支援を考える】ことの重要性を学んでいた。

4）【連携と多職種の関わり】

研修者は〈サポート担当者会議〉を見学する中で、「利用者・家族も含めた全関係者で相互連携を図っていた」と連携の重要性を理解した。ある研修者は、1冊のノートに記された多職種の記録を「カンファレンスの意味を持つ」「一同を会することはないが人々を束ねている」と捉えていた。

5）【経済的負担を考慮する】

「患者や家族の経済的負担を考えずに関わることは、信頼を低下させることになりうる」「経済面とサービス面のニーズが合致するように説明と同意が必要である」と【経済的負担を考慮する】必要性を学んだ。

6）【内省と実践評価】

研修者は「今まで自宅退院した患者に統一した介入ができていたか疑問に感じた」「指導は退院後にうまくいかされていない」と今までの〈実践を振り返り、評価〉していた。また、「在宅で介護を行っている家族にとって、看護師からの指導がいかに重要か気付いた」「自分も在宅療養支援に関わる一

員だということを念頭に置きながら働いていきたい」と〈看護の意味を考える〉機会となっていた。

7）【退院支援における病棟看護師の役割を再考する】

「個別性のある関わりは何から抽出されるか、それは人となりだ」「今まで自分が行ってきた看護は身体的側面を重要視してしまいがちであった」と〈心理社会的に支える〉ことの大切さを感じ、「本人・家族の疾患の受け止め」「生き方、目指しているもの」といった〈看護をつなぐために必要な情報〉を伝えることの重要性を認識した。また、〈訪問看護があることを伝え療養の選択肢を広げる〉〈訪問看護との情報交換、知識を持つ〉ことを役割と考えていた。一方、「病院で最期まで過ごすことを選択した患者や家族に対し、そこが家となるように整えることは病棟看護師である私達の役割である」　と病院での看取りを改めて考える機会にもなっていた。

3．研修後の課題

研修後の課題は、【生活の視点での情報収集と支援】【他職種との情報共有と連携】【早期からの合同カンファレンスの開催】【療養の選択肢を広げる】【学びを共有する】【病棟全体の取り組み】の6つのカテゴリーが抽出された。

研修者は〈生活の視点の情報収集〉や〈患者の主体性を支持〉すること、加えて「日々のケア内容を考える時も、患者に関わる職種間で情報共有と連携をとる」と【他職種との情報共有と連携】を課題としていた。そのため、【早期からの合同カンファレンスの開催】、さらに、【研修の学びを共有する】こと、〈情報提供方法の検討〉〈病棟内のシステムづくり〉等の【病棟全体の取り組み】が必要と考えていた。

## Ⅴ．考察

研修者は、入院中の看護と異なる生活の視点や訪問看護の関わりを見ることによって、日頃の看護を振り返り、退院支援における病棟看護師の役割を再考していた。高度急性期病院の看護師は自宅の生活をイメージしながら、個別性を踏まえた退院支援を早期に展開していく必要があり、その視点を養うためにも研修は有意義であった。

先行研究でも病棟看護師の退院支援の意識向上のために訪問看護同行研修を行っており、在宅ケアの推進に寄与する一助となることが報告されている[1)～3)]。本研究で見出された学びや課題のカテゴリーも先行研究と大きな相違はなかった。しかし、先行研究の対象者は、経験年数20年以上[1)]、平均年齢41.7歳[2)]、平均年齢40.8歳[3)]と、比較的熟練した看護師であった。本研究の対象者は20～30歳代の看護師が多い。このことにより、年齢や経験年数に限らず、研修対象者を広げても、退院支援に対する意識向上を期待できる可能性が示唆された。ただし、課題に対して病棟内で退院支援の推進役となる、調整役を果たす等の行動レベルの記載はなかった。今後は、研修後の学びを実践に活かすことや課題の解決に向けた支援を検討していきたい。

## Ⅵ．結論

1．訪問看護ステーション同行研修の学びは、【対象を生活者として捉える】【訪問看護師の役割を認識する】【家族を含めて支援を考える】【連携と多職種の関わり】【経済的負担を考慮する】【内省と実践評価】【退院支援における病棟看護師の役割を再考する】の7つのカテゴリーが見出された。

2．研修後の課題は、【生活の視点での情報収集と支援】【他職種との情報共有と連携】【早期からの合同カンファレンスの開催】【療養の選択肢を広げる】【学びを共有する】【病棟全体の取り組み】の6つのカテゴリーが見出された。

## 引用文献

1）戸塚恵子、上谷いつ子ほか：病院看護師の訪問看護同行研修における退院支援に向けた学習効果と課題,日本看護科学学会学術集会講演集,36回,ｐ532,2016

2）茅原路代、新田幸子ほか：リーダー育成研修－在宅支援看護－受講後の「学び」からの実践,第46回日本看護学会論文集,看護管理,ｐ123－126,2016

３）松原美由紀、森山薫:訪問看護の同行訪問を経験した病棟看護師の退院支援に対する認識の変化,日本赤十字広島看護大学紀要15,ｐ11－19,2015